百花爲序

東京都立中央図書館蔵

東京都立中央図書館蔵

鳥図百花鳥
ﾏﾝ ﾕﾊ
ﾅ1020

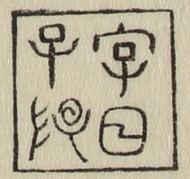
梅花鳥百可以集千名萬
花千花萬名多之枕其枕內
枕頭之餘錄是觀之則
非特等閑百花百名
可以意玩鳥以別畫之
生意展如玩花而畫

去葉去蕊去蕾去蕚去
蒂去露去蔕去
蔕去雪去樣
去高處去角去
去蹲者去拙去樹者
抗去搏去雀枝去
共棲者雖去翎去
刷翅去

秀麗所感会咲ニ噱ス
以上百会稿都捨以撰
畢竟雖然一吉を恐悦目ニ
蘇古体繫ニ平脣腱ス
可者豈謂乎情態乎如
素而未集編則所用

鉛之方尚已意後素ス按
所ニ付ス恒ニ之化ニ乎則見
百多一ノ子ノ百也ノ多ノ
是逸編者ニ立ニ邪石
中子画ニ也ニ肥梓ニ弐多
者因爾書ニ序ニ於余

於是年立春好辰
享保戊申秋月雨夜
東都龍洲東隱鳴鳳誌



百華鳥圖　孟隣叟待野探雪守完門人

野之鬚髮山下石仲子守範紀

勸時雌星花
蜃氣樓輝山　校
高橋　範明
小早川豊次

附言

一大東言畫者。不可勝算矣。中世有狩野祐勢永仙二子。特啓厥迪而遂爲

狩埜氏之箕裘。乃其妙至探幽。以成一家。凡仙佛山川人物花卉淡墨傳彩。皆能兼之。以獨步于海内。至今世之鳴畫無不沿其流者。矣故寸絹尺楮。散落人寰者。戸收家藏可不謂卓犖不偶者乎。

一百華鳥舊本。出探幽手筆而爲魁本帖子。獨爲豪家見占。幽石仲子嘗學狩野氏者有年。遂舁其本爲小冊子。附剞劂氏。公之于世。

一丹鉛之有方。專門家所秘。今已洩機。恐獲罪大方。示惠後進好事者。

一艸木之真偽。禽鳥之區別。古人其猶病焉。非畫家所識。悉隨舊本更俟博洽之人。

一刻將就梓。遂加贅辭於其上。聊做華

人之類算其丹青家務專干業務嫺詞
賦者。豈以分淄澠爲故歌詩炙輙隨
得録之云。

灝雪道人岩蹇驢記

注印採幽高の作詩をもく
天下を治る上を王公大人
より士農工商に石うつ
わら屋根葺世をうの石
ものをもちいる事別に
ふしぎなへつ
つ所に徘の句をもへ

物にしらるゝ清行の
そ牡あるゝ或あれ
牡ゝ乃ち
さらよ秋のあ
雲いろ月
あ伏の
弦ゝ

なるゝ酔ゝ伏せの
まれて清ゝ白ゝ
出し伏れ

花ゝ

織上手

紫野屋士の孜丙

畫圖百花鳥總目

卷之一

桐鳳凰　一
葵孔雀　二
磐梨就鷄　三
朴木鶺鷹　四
石荷鷄　五
松菫鶴　六
竹萬年青鶺鴒　七
萱草遊鵲　八
野菊白鳥　九
玉蜀黍雁　十
水蓼白雁　十一
仙翁巻鸞　十二

長春吐綬雞　十三
千日紅鷄似錦雞　十四
茶蘼錦雞　十五
梨子精衛　十六
華鬘きんみの鳥　十七
鄭蜀白鵰　十八
木凡山雉　十九
菱鵲　二十

巻之二

川原桔梗蒼鷺　廿一
勢井草野雁　廿二
澤瀉鴨　廿三
石斛鸕鷀　廿四
小蓮華鵁鶄　廿五
苦薏鼉鳥　廿六

菊雉子　廿七
蓮鷺　十八
水葵水札　廿九
白菖鴛鴦　三十
萍蓬草鸕渠　卅一
南京梅南京鳩　卅二
金盞花雞　卅三
南燭鸛鴉　卅四
志ゆかう刀鴨　卅五
剪春羅千鳥　卅六
鳶尾鴫　卅七
鼠麹艸鷗　卅八
金絲桃鵲斑鳩　卅九
梅鵲　四十
茶樹四十雀　四十一
福壽草七紀鳥　四十二

瞿麥風鳥　四十三
杏子鵲　四十五
柳三光　四十七
紅毒嶋鴿　四十九

卷之三

李紅雀　五十一
秋海棠鷦鷯　五十三
蠶子粟鶲　五十五
檀特鵠　四十四
紫菀鵙　四十六
荒世伊登宇き祢もみ　四十八
虎杖あぎ我　五十
山茶花鶯　五十二
糸櫻練雀　五十四
皷子花鴿鴿　五十六

蒲公英雲雀　五十七
櫻桜吉了　五十九
芍藥畫眉鳥　六十一
白木蓮華桑鳶　六十三
茱萸頂小鳩　六十五
葛鶸　六十七
水仙鶺鴒　六十九
桔梗黒鶫　七十一
黄蜀葵雀　五十八
豆藤小陵鳥　六十
覆盆子翡翠　六十二
牡丹菊戴　六十四
石榴八頭　六十六
をくつまき文鳥　六十八
石竹比翼鳥　七十
丁子草尾長　七十一

巻之四

郊苍杜鵑　七十三
連翹翠雀　七十五
沙羅雙樹碧鳥　七十七
百合深山頰白　七十九
芝蘭鶯　八十一
海棠黄鳥　八十三
さんこ海棠鷲　八十五
雞冠鳴　七十四
風蘭啄木鳥　七十六
牽牛苍忍冬　七十八
仙臺萩鳥　八十
椿青鳩　八十二
萩鶉　八十四
木槿きんだら　八十六

桃音呼　八十七
柏繡眼兒　八十九
刈萱白雲雀　九十一
木綿唯紅鳥　九十三
笑靨櫻桑鳥　九十五
風車川原鶸　九十七
辛夷木兎　九十九
鷹爪山雀　八十八
木芙蓉鶲　九十
柿花山鵲　九十二
藤燕　九十四
蘭駒鳥　九十六
さるぼりいだら　九十八
萱くだて　百
枇杷鶏

日光山慈悲心鳥　高野山佛法僧鳥
總羅漢寺　阿蘭陀繪　花鳥寫　左右

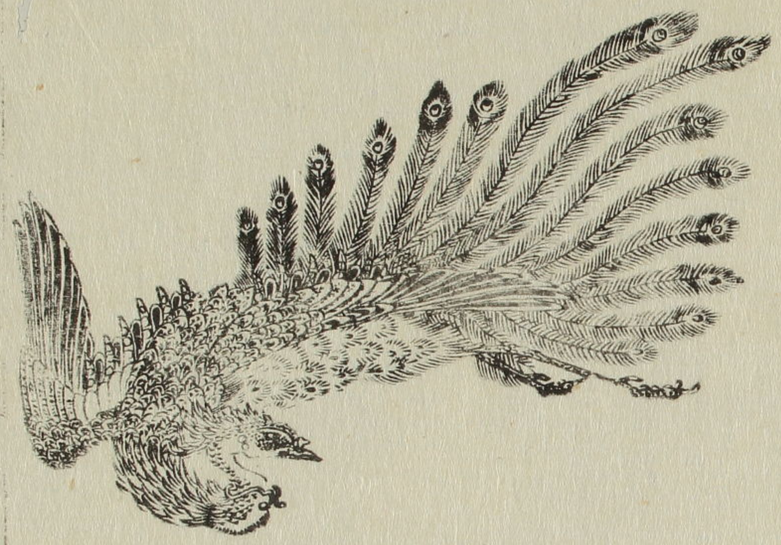
附録

誹諧

歌仙　四卷

百韻　二卷

百花鳥總目終



るこれや相ゝこゝみへ所代の色

露沾子

第一

桐

葉も花もまの汁でうくま小緑青うち
くされ汁にて彩りさ花も花わさ花の具
わりあんぜんぜんとこうんぜんぜん細
をうくふ木の胴木の具とみうとを
ふくま苦しのやくろくまの汁入色りご
うんうそりとけくぐ

鳳凰　鵬鷄　今　奉皇　今　天ニ在ニハ朱雀

一ハ　鳳ハ雄也　凰ハ雌也

頭ようの羽脊中まてろくさるわりうんぜんぜんそ
姿を入る黄足脚色ちんぜんぜんろ風切羽ふ
り具とみうくまふ羽ふ土くま朱とみて
九こ姿をへ尾ふ尾ふを彩りさもすえ
但一中二彩の尾白一ごうんわりごうんて
彩りさちんこ黒わりあんぜんぜん伴きわりうけ
りとごうんうそんぜん切べし服ふうどもりうき
ごうん無伴毛書出入水時金泥ふ具べ
一右桐色ふ彩ふ九ニ丁准ふ

第二

蓼　滑菜　今

葉緑ふ土ふまの汁ふ色はく彩出葉の
じのそりくふ彩ふりふくまはくふりうき蓼
つりきたニ白緑ふりの汁て仕色べ一花
ふ牛の具ふ牛ぜんぜん色ごうんのうふ入
べし

孔雀　孔雀　今　越鳥　今

孔雀中九緑ふりうんぜんぜんて姿を入色一
いぜん紅九　目の四ふ黒ふ目ふ黒ふ
頭わりふ背足ふ黒の具ふうふりふ服ふ一
すふの具ふりふくま足ふて姿を入る風切ふ
うす足ふ色ふ色ふ二ふ羽ふうぜんぜん
ふ色小羽ふ黒の具わりふ紅ふ色ふりふ色ふ
うんぜんぜんわいはふ色ふ金泥出入尾ふ色ふ
ふ色上ふ合ちやとうけ朱ぜんぜんと泥ふ色ふ
ふふんふうふ色ふて入上ふうんぜんぜんりふくやふて
きわひへ外ふ金泥ふ色ふ色ふ色ふ
雌ふ伴ふ雄のぜんぜん尾ふぜん尾ふ黒ふ土朱
ふ色ふ色ふ色ふ色ふ金泥

いとあらはれ出の尾をとらひ　岑水

いとなしも鷲の姿や大わし

長江亭 沾風

第三

鵠梨

梨絵まき付立ものの汁絵書花をかの奥付立せるもの花はくるま朱ごみ

鷲

鵰 今 鵰 今 大鷲 今 鷲 今

用の内ごうん入上こしらえくちばし嘴墨の具をみな白ごうんつ白絵おとしたけ足地じゆくろくわりごうんして墨書紙除わりもとこしらえくまけ爪をみくま爪さたごうんつ後

金粉白仕立地ごうんうちくわりごうんくまごうん毛うきこ尾羽もれ白さ枝わりむごうんもそ波地ちとずみくまあいろうけごうんうちくうけあむろとりいづれも相移りそ立入べし

第四

朴木

梨ト地梨の汁まり濃小ろくやうけ梨の汁して節うきをさしようおびく枯くま合まうどうけちゆどみくろべし花をかの奥うとをんくこは花のうさたようごうんうけ地粉白猪こ仕立べし木の胴もうえうまとこあいろうけ下あく合まうどうもこ苔こ合べし

鶴鷹

鶴鷹 大鷹 今

用の内鶴れどくしく嘴うとすくこ白絵わりごうんわうあうとたちうけ大格うこれはじ地粉うとずみくま者のごく濃をみうこ薄わり服うとごうんうけ毛ごさ濃ごうんあかど細く立入べし

雪人のむらいろや卯月哉　舍人

大門　鶉ノ目　配

西日ゝ石苔のつゝ紅　園香

岑水

第五

石荷（ゆさのちく）　白豆（仝）　虎耳草（トモ）

葉、茎の汁付き毛んでうすくけ毛んでろ
見、御出、茎茎ぐみ花毛んでの見

鶴（こたう）　又はけうろう共

用の四茎ぐみ花用ど見た用ど無稀茎
ぐみ毛後法毛みうて府茎のぐ〜服
ごうんくま毛出ごうん出出大ゆうよ用ど

実うとうと茎うけあいろうけ合
ううぐうひうみ人合若実ひぐ〜

第六

松（まつ）　仝　榕（マ）　察

葉毛地毛毛く後茎の汁うけ上に緑青毛こ
ぐんけて葉毛めき茎いとううこ白緑角
茎もう〜胴出毛の見茎うとう若見合
出大和松彩色日本松という

董（とうこん）

葉小緑青付き花紅白二色紅いうこんん
ど地毛ぐの見上にんぐけ中こぐんぜう
いそうかひをみる白いごうん仕毛

鶴（けう）　丹頂

用の四茎ぐみ嘴あうだごうんつき首
見茎仝体白〜うすうごうん地う
うけごうんく後ごうん毛出

元常毛毛出毛白〜鶴う周
青〜松う茎　水光

吉田 曼美

第七

竹 一名石毋草又此君 吾友ト也

葉緑青茎の汁ニ成円爲蓋 枝緑青書入是うき茎ハ汁ニ

萬年青

葉緑青茎の汁ニ成円爲入実朱もて仕立

鶺鴒

目朱ごみふちあさぎごうん也入頬肉色朱ニ成ル先ハ突き 背中うとずゑくまよとこあいろうけ尾ごうんわりごうん毛出 脇是の具ニ成ル足黄土乃具合ごうんごうん朱ごみ

第八

萱草

葉ニごん緑青茎の汁ニ成爲也 花ハ成ル成ハ爲入 ハ爲也圖のごとく

遊鵲 又鴻

目の内ハ朱ごみ 嘴足白緑具茎の汁ニ成ハ ハくろ 嘴の先ハ黄こ分一きごみあり 合黄土くべ足ハ合ごうごうこうひ くまあるくまくさ朱ごみ也入 黄粉白し ごうんうすくわりて上ニ少法ごうんにて成 どろべ 風切羽尾ごうとく成りく合 ごうけ先へごうんくべ 脇あご是ハ成府を突上ニ成ごうのく爲 ごいと朱ごみ成府を入少合ごく べ

雨收萱艸色
日抱野禽聲

白主

白雪の波を蓮葉の雲間

帝文

第九

野菊

菜二ぐん緑青付立茎の汁にて給出
花ことあさがをぐぎいようきんじく成
まごうんてきたるうけ
ちくさ穂合まるぐ朱どみうて突小
草くさの汁うさへ

白鳥　鵠

目の内朱どみ目のふちうり嘴でまで
合まるごくべし黄とみの具是くま
想所白しも地うすごうんあり少淡さ
ごうんまわり上目毛出あり

第十

玉蜀黍

菜要祥白緑うとくわくの茎の汁まりく成
ほく給出表ぐへ二ぐん緑まこんすうけ裏
葉じゆくろくのまたて合まるぐせうあ
うてきわひく成足合べし　葉じゆくろくて
突せうあげ出入実白緑わり茎の汁
くま給出せうろんうて出入

雁　鴈

黄英出の具先少量く成上三茎の汁うけ
肉ごいお白し茶どみうり長むけ
具うてわりうとすんくま朱どみうり
頭所背中黄の具うすうと足仕立黄
毛うきごうん出入わり腹白しいづまと
ごうんわりけじ毛出めべし

方十星寝ようとて丁のあ
いけを拒ふも十す種わり

鶩成人
沾入

蓼ゑり稜武ら作を詠支度

沾意

十一

水蓼（いぬたで）　葒草　又 遊龍　今 天蓼

花ハ本だの奥付立セうるへし実ごふん
まて一帰ノ外まりに早紙渋くべし
葉ニさん緑青付立茎ゟ汁すてまり
く彼筋うきの茎白緑すて付節ざへ
よりゑ本だにて鼓をぬるべし

白鷹（はくだか）

目の内ゑすり嘴足肉色ありよニ朱
のさゝゑすそく彼ぶり生うゑ本だくくり押
身白しうとごふんあり少濃きごふん
く彼毛がきさそべし風切羽も地ゟとの
奥すみくま毛ゟ目黒すそとるべし

十二

仙翁花（せんおうけ）　剪秋羅　剪紅紗花ノ俗名也

花ハ地肉色付立セ明冊あり世うゑ本だく法
葉ハ二ぞん緑青付立茎葉の汁うすよ
筋ゑとべし小茎ゟへとべしいづれも二ぞん
ろくにてそよう

鸞（らん）

目の内ゑすりふちそうへん外肉色の上ニ朱乃
くまゑ本だにて実紫嘴足ハまご此奥めり
合すうごうて彼朱ぶとみくり足まの方
まかなくせうゑ本ぶしさふんの紫墨生の
奥ありすとく彼上へ朱ぶとみうけ目く実
ありゑされてらくに濃く府あり紫濃墨
まく付うゑ上ニ紺青を入又わよくおり
緑青を引べし当りの王乃ぶとく
ともり故すで合すうど朱ぶとみそ
実そゝ巻の奥上ニさそんゟま目ぶく毛
さそべし

癖者口吟て一国序吟仙翁也

露人

花ちるまでの命やひまひ

露月

ゆふれむや錦雉そゝるあかる涼

日光 雪溪

十三

月季花（ちやうしゆん）

長春 本艸ニ金盞花ノ異名トアリ

葉ハ緑青にわりまかく隈紛をさし葉の
けすじて花臙脂ハ具にわり墨ちやくはけの端
より薄ごふんにてくまどりつぼみハ臙脂
とも少濃く仕立べし

吐綬雞（とじゆけい）

同の所朱どみ頷襟むまれ中紛をさ白し
背ごふんく隈也耳頬朱どみくはうすく
くまかし背中まうごの具わりてさきつけ飜
のしく翠わり朱どみ入上に金泥をひく
風切羽墨の具墨くま尾白緑の具すこ
くまかし墨の汁く隈墨り金けいれどく虎
ぬわり金茶又よそわり墨にて脐をいるる
下毛出金泥去入腹合也黄出毛去朱中黄
ごふん出入足白緑墨の汁仕立しのりく
わり黒さ紛り墨の汁くまの中の白き朱肉
色わりの上ニ朱くま也此鳥をのをが肉を啖
といへり則此赤き所を啖とぞ

十四

千日紅（せんにちこう）

葉ハ緑青付立まりく隈紛をさし葉の
けすじて薄白緑墨の汁く隈せをさんど
くり花臙脂ゑんでうてふせをさんど小草
墨の汁あいろう去入

錦雞（きんけい）

同の所ぢまう嘴足肉色をんどく隈肉
色上ニ朱くまかし翠の具わりをさん
く隈とみ毛去をりにてをさんどまて墨さ
のる背中ニ翠わり金泥にて密べし
羽墨の紛り白き墨ごふんにてつく也
又白き脐わり背ごふんを用ゆべし尾
金錦雞ニ同じ法をもて仕立べし

井出やまぶき錦鶏宿れる川やなん　自嘯

十五

茶蘼（やまぶき）　棣棠（又）　酴醾（又）

葉小緑もしくは白色茎黄色皆茶の汁茎白緑茶の汁茎白ドウ色花もしくは黄もしくは白緑もしくは仕立

錦鶏

目の内朱色こうもあるこれかもんどり乃具もんどりまるでさき白ごろうん毛黄色ふのごとく合まうぐ黄にて府を入もろさ朱すじ金泥背中緑青紺まじりて鏡入ル羽黄色成朱ぶとみのけ風切黄色成尾中二筋白絶黄土具朱ずきにて府を入揚尾赤ごろ白色わり朱にて塗上もんどにて実入目毛黄脇赤朱にてもんど毛黄極紅の毛ニ成色ろと目ド嘴黄色朱乃上絶黄黄土具ちみ仕立

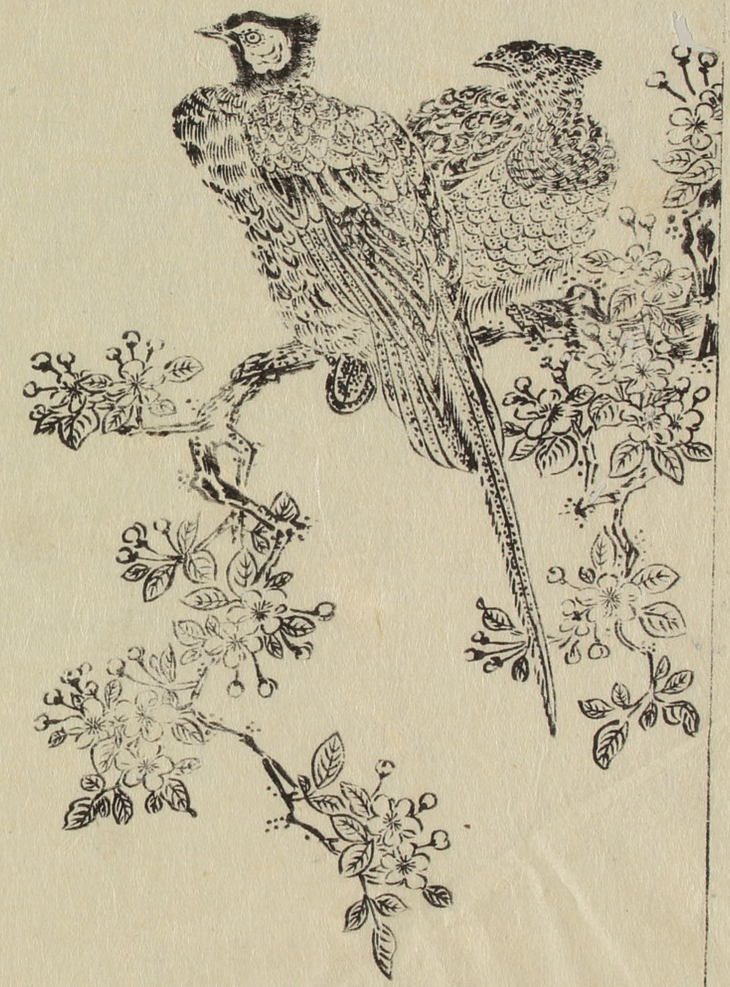
十六

梨花（ようのなる）

葉二ぢん緑茎茶黄いづれも茶の汁花白色白ろくの具こまて白く合わりと黄ごうん成色べ茶の汁ちてうてるろくせう白こどんを用

精衛（せい えい）

頭黄成目のまちごうん赤肉色朱成せうもんどまるひ入全体すこぶわりて黄くま茶ぶみてとて成とり目実ぶ中合黄出脇合まうぐ朱ぶどんとり毛黄嘴黄乃具黄黄色もんどの具色ぶとり尾うすどこの具物ちごうん成黄色のそりをつきごうんとてりを実ごうん毛黄雌の仕黄大結雄目ド黄体雄こうもこうすら仕立べ頭合黄土朱ぶみ仕立



清一艷　一一株ノ雪　春一竟　已ニ化ス貪ト
長ク　付ク枝一葉ヲ去ラ　滄一海　弄一思深ク

森如尹

綱の音は加茂の葵も哀なり

乙九

十七

華鬘（けまん）

此是の花正花をさうしきまり かうなせ

花冬中の具付出せう冬中ゟ咲渡る色
いろいろ多く咲葉ハ蘭のやうなるかんざし合見
事也 仕立て一葉白縁付出 葉のけ
くま筋を出したるに二だんとうすくして

十八

躑躅（てきちよく）

黄杜鵑 へんれう 又杜鵑花 紅白紫三色をはじめとし

紅ハ肉色あり春にて仕立多くぼりかゞ出し
咲いたハ冬中の具せう冬中ゟ咲渡る八角の形
粉ありてあり上る下地白縁の具あるべし葉二
だん縁まく葉のけくま目ゑ出る花の中に
ちべありごふんにてひたしかけの具

きんみの鳥

此鳥ハ具内同黄々黄ちらごふんにて地緑
下地白緑あり上ハ緑まきとせう冬中ゟあり
まけみの毛羽端ハろくせうく肉葉の付毛
出えハせう冬中く肉同毛出あり服黒く
もみの具あり黒くまずく毛出尾白し
ごふんあり同毛出足冬中の具せう冬じ
くくま

白鷴（はくかん）

同の同黄ものちらごふん面赤し肉色あり
朱く肉せう冬中のきわひハ地身白し落
く胡粉ありてあり上黒にて府と墨のおく
出のぼう服黒し黒の具あり色くまく
毛出ほし紫すう墨足ハ肉色ありて冬中
く肉冬中ゟくり雌地身黒く肉よりにちや
色をくるそか同紫足ハ雌よりまさる也

白鷴や はしりの萱を おもて来

山紗

ちりうもちるこのむやゆきの

引原亭　子石

十九

木瓜　木桃　木李

花開色上に朱をとくべし赤色を後にうりくさ
仕べし志べりをひしもうれ是を用ひ芝
白鶴そよう桑小鶴そ苔ひ竹茶を
玄へべし

雉

尾の内朱是面赤し朱に成せ毛を付つき
八當是と尾に位し是の其中是に成
金絲是赤に成上に朱どうに成ゆ資中ゆ赤土
ちゃを加べし毛を朱ずくごうんとんを
べしら尾先ごうんに成尾毛を服是に成
上に金まくごけごうん毛を也其中ゆ
ろ紙入べし紙の府朱をみ加鶴也是ろ
かしら色淡つよく仕べし

二十

菱　芰　水栗　沙角

花淡ごうんにて付を赤中に赤くのかを
ろ入べし　葉青とどんうて付を赤に汁
加赤しめを絶ようと是に成上にあいろうろ
よをとんうすくに加遍もしべしの加ごうんにて
玄へべし

雀　俗ニ鴻ヲ用ハ非也　鶉

尾の内朱ごみ尾尻に就よかをうにて白を
付べし背是に成合ようどの白是黄土ろ
其合をうどくまをのごみをて玄れをも
絶体白ごうんをろ尾の尾切前ごろろ其
ようくま加ごくにきあわり是に成うと
ろて後まごうんを成くべしの加くへの是の
ろくをかれて仕べし俗ようこのあをう
ろくをう

蒼鷺の長き脚の際まで

貞麿